

吃音ありのままの姿で

小2女兒の家族 正しい理解願う



「吃音はその人にとって普通の話し方」。言語聴覚士の内藤さんの説明を聞く諏訪市城北小学校の子どもたち＝昨年12月17日、諏訪市

県内では吃音の特性などを学ぶ機会を設ける自治体もあるが、まだ一部。そんな中でも学校現場に入って吃音の特性などを説明し、理解を広げる活動をしている言語聴覚士がいる。松本市の内藤麻子さん(5)もその一人だ。

言語聴覚士ら活動

この児童はクラスメートの前で「どうりながら話すのが私の話し方です」と伝え、そして続けた。「吃音を不思議そうにしている人がいたら教えてあげてください」。クラスの男児たちは話を聞いて、「あ、あ、あ」とつづいて、「うのが普通なんだね」と話した。内藤さんは「治さないといけた。

前川　参考方では、本当に気持ちは表に出す機会を奪う」とになる」と強調。本人が吃音を意識しないで話せる環境つくりを求める。

県教委特別支援教育課によると、吃音などがある児童が通級指導を受けることばの教室は県内に47教室ある。研修を受けた教員が吃音のある児童の相談に乗っているが、こうした教室があるのは現在小学校のみだ。

県内学校現場 特性学ぶ動き

母親(31)によると、娘は2歳の時、突然、吃音の一つつで「連発」語頭の音を繰り返すで話し始めた。「朝起きたら急に「マ、マ、マ、ママ」とて」。食事中にうまく話せない体に力が入り、弾みで動かし

た頭を食卓にぶつけたことも
あつたという。
5年たつた今は症状が比較的落着き、話しづらい言葉は言い換えるなど自分でコントロールでは思はない」と母親複数回娘が幼稚園に通っている。他の保護者に娘の話題をまねされたことがある。娘の話し方を不思議がる娘もいた。吃音が理解され

娘たる園地で、女児が通う小学校は、母親から事情を聞いて教職員同士で吃音についての講習会などを開いた。女児と同じ幼稚園出身で吃音や女児の話の方を理解している友だちも多く、

「きちんと理解してほしい病氣があります。吃音という言語障害です」。長野市の女性(57)が、本紙「声のチカラ」(コエチカラ)取材班にそんな声を寄せた。孫の小学2年女児(7)には、言葉がつかえたり出づかえたりする症状があるといふ。アメリカの大統領に就任したジエラード・ブッシュ氏も少年時代は吃音に悩み、克服に努めたとされる。吃音は抑えようとすると悪化する。それ、そのまま話せる環境づくりが大切だが、世の中の理解は十分に進んでいない。

吃音 語頭の音を繰り返す「連発」、「ありがとう」を「あーりがとう」と伸ばす「伸発」、最初の音が滑らかに出ないため力んでしまう「難発」といった症状がある。声を出そうと体を動かして弾みをつけるなどの「随伴症状」を伴うことがある。原因は特定されておらず、確立された治療法はないといわれる。2～5歳ころに約100人に5人の割合で発症するといい、多くは自然に消えるが、100人に1人程度は大人になっても症状が続く。

その人にとつては普通の話し方

吃音 語頭の音を繰り返す「連発」、「ありがとう」を

卷之三

自治体独自の研修も

53)を講師に、地域の教職員や保育士向けに研修会を始めた。現在は上田市教委とも連携して受講を呼び掛けており、延べ約700人が参加した。

教育現場では、理解不足もあって「様子を見よう」という対応になりがちという。餅田さんは、話しかけが増して不登校などにもつながりかねないとして、「話し方の違いを知つて認め合ひ、「違う」「おかしい」と捉えない教育が必要」と訴えている。

独自に力を入れる自治体もあ

情報お寄せください

友だち
に登録



A QR code located at the bottom right of the page, with the text "特設サイトは
こちらから" (Special site from here) positioned above it.